

授業に向けた学習環境の整備を行った。5月中旬から教員のみWebでの授業を再開し、6月以降は状況を見ながら各講師による対面とWebを併用した授業を行っている。

現在は、「専門学校等における新型コロナウイルス感染症への対応ガイドライン」に基づき、「新しい生活様式」を踏まえた感染拡大防止対策を実践しながら、講師や各施設の理解と協力を得て、講義・演習、臨地実習を行うことができています。

今回の取り組みについて報告する。

14. 身寄りなく社会的問題を抱えた患者支援の一事例

医療社会事業部 地域医療連携課

内海 敬子 清水 雄貴
中井須美代 熊田 真衣
細岡明喜子 糴川 友紀
家村 香織 河南 孝子
谷内 美春 前田 智成
太田 加代

過去一年間（令和元年11月～令和2年10月）、地域医療連携課が介入した身寄りのない患者数は49人（複数回の入院含む）にのぼる。成年後見人の市区町村長による申立は約10年で2倍以上となっており、身寄りのない人が年々増加している。国の動向と地域医療連携課の支援内容は連動している。今回、身寄りのない社会的問題を抱えた患者の関わりを通し、意思支援者のいない人の人生を、支援していくことの難しさと重要性を実感した事例の報告を行う。

【事例】50代男性。脳出血を発症し、当院に救急搬送された。入院時失語あり、意思疎通は困難な状態であったため入院当初より支援を開始した。症状は改善し、ある程度の意思疎通は可能になるが、再出血をきたし手術を行うも再び意思疎通が困難となった。身寄りがなく、健康保険証、会社、同僚・上司というきっかけから、患者の生活背景を知り、退職時期とも重なっていたため健康保険の手続きや金銭管理、成年後

見人申立の支援を行い、療養型病院へ転院となる。

15. 鞍上部・松果体部に発生した中枢神経原発ALK (anaplastic lymphoma kinase) 陽性未分化大細胞リンパ腫の一例

脳神経外科

大前 凌 新光阿以子
高橋 和也 高野 昌平

血液内科

浅野 豪

【はじめに】

中枢神経原発悪性リンパ腫のほとんどはB細胞由来であり、ALK (anaplastic lymphoma kinase) 陽性未分化大細胞リンパ腫のようなB細胞以外のリンパ腫は非常に稀である。今回、鞍上部・松果体部に発生した中枢神経原発ALK陽性未分化大細胞リンパ腫の一例を経験したため報告する。

【症例】

26歳女性、既往歴に特記事項なし。約1ヵ月前からの頭痛、悪心で近医を受診し、頭部MRI検査を施行され異常なく経過観察されていた。その後も症状増悪傾向にあり当院を受診した。頭部CTで鞍上部・松果体部に腫瘍性病変認めため、精査・加療目的で当科入院となった。入院時、意識レベル清明で明らかな神経学的異常所見は認めなかったが多尿・口渇を認め、血液検査では汎下垂体機能不全を認めた。診断確定のため神経内視鏡下に鞍上部・松果体部の腫瘍生検を施行したところ、病理所見はALK陽性未分化大細胞リンパ腫であった。PETでは全身には病変なく、中枢原発と診断した。現在、当院内科にて化学療法中で腫瘍はほぼ消失している。

16. がん化学療法における薬薬連携の現状 薬剤部

○島田 健 大里 勇二
中村 祥敬 江本 文代

瀧 真由子 上野 聖子
中村進一郎

(目的)

令和2年5月より、外来化学療法施行患者に対して、薬剤師が化学療法についての文書による情報提供を行うことで連携充実加算（150点/月）の算定を開始した。同時に患者情報について院外薬局からFAXによる情報提供を受ける体制についても整備した。そこで、当院での連携充実加算の算定状況、及び保険薬局からのFAXによる情報提供件数について現状を調査することとした。

(方法)

令和2年5月～令和2年8月の連携充実加算の算定状況、及び保険薬局からの患者情報提供件数（FAX受領枚数）について調査した。

(結果)

令和2年5月～令和2年8月でのべ214件の連携充実加算の算定を行った。また、保険薬局からのFAX受領件数はのべ95枚であった。

(考察)

病院からの患者情報提供に対して、薬局の側からも活発に情報提供がなされていることがわかった。今後もさらなる連携充実を図っていきたい。

17. 骨密度測定装置（HOLOGIC HorizonA）による評価方法

放射線技術部

本村 壮司 辻井 貴雄
天野 隆司 岩見 守人
井手 充浩

近年、高齢化社会が進み平均寿命は年々延びており、生活の質（QOL）を重視した健康寿命に関心が高まっている。2016年のデータでは平均寿命と健康寿命との差は男性で8.84歳、女性で12.35歳となっている。これらの問題を検討する指標にサルコペニアがある。

サルコペニアとは身体的な障害やQOLの低下、および死亡などの有害な転帰のリスクを伴

うものであり、進行性および全身性の骨格筋量および骨格筋力の低下を特徴とする症候群である。高齢者におけるサルコペニアの影響は深刻なものであり、サルコペニア症例の発見は高齢者の健康寿命に大きく影響し、同一個人を同一測定方法で長期にわたって変化を確認することが重要である。

以前の骨密度測定装置は全身を撮れないためサルコペニアの検査は行えなかった。今回の装置は少ない被ばく線量で全身の骨密度、脂肪量、除脂肪量を測定することが可能であり、その評価法を紹介する。

18. 看護師と看護補助者との協働による看護ケアの充実を目指して

～看護補助者の遅出業務を追加して～

看護部

○芝山 富子 柴田由美子
太田 加代 高原 美貴
芦田真知子 駒田 香苗

【発表要旨】

当院看護部では、医師の負担軽減策として血管確保や静脈注射、抗がん剤投与や輸血、特定行為研修修了者による活動等に積極的に取り組んできた。一方、重症度、医療・看護必要度が常時40%以上であることから、看護師はやりたいう看護が十分できていないとジレンマを感じていた。そこで、看護補助者との協働による看護ケアの充実により患者が安心して夜間を過ごせること、準夜看護師の負担を軽減することから、2020年9月1日より看護補助者の遅出業務を追加した。また、同時期にコロナ禍での看護学生のアルバイト先を確保すること等の理由から、看護学生による夜間看護補助者のアルバイトも開始した。

これにより、夜間帯の勤務者が増えて業務が分担できることから、看護補助者が環境整備の充実や安全かつタイムリーな看護ケアへ参画できるようになっている。

看護補助者の遅出を追加したことによる現状